

熊本市市民活動支援センター・あいぼーと
市民活動総合情報誌

あいず

eyes

第4号

2014年1月号

特集



活動継承 NPOを続けるためのポイント

市民協働 次世代へ継承する市民協働

特定非営利活動法人

やぶさめ

武田流流鏑馬保存会



1) 伝統文化の継承

昭和36年に、竹原正文46代師範が流儀の技術保持者として「熊本県重要無形文化財」の指定を受け、昭和46年没後は、竹原陽次郎47代師範がその保存会設立に尽力し、昭和50年には、団体として文化財の再指定を受けました。平成18年から「やぶさめ少年塾」を開塾して若手後継者の育成を目指し、平成21年10月には「武田流流鏑馬保存会」が特定非営利活動法人の認証を受け、新たな発展に向けて精進しています。

2) 活動状況

毎年、細川家ゆかりの出水神社で春（4月20日頃）、秋（10月17日）の例大祭に奉納し、5月初旬人吉市のお城まつり、10月初旬熊本城一の丸広場でお城まつり、11月中旬八代妙見祭、3月下旬古武道演武大会、弓道の先師祭等においても伝統の演技を披露しています。月例会では、乗馬クラブで馬術と騎射を、幽玄館道場で弓道と流鏑馬の射技と作法を木馬によって稽古し、伝書や古文書の研究等も取り組んでいます。

3) 由来

弓の道には、普通の歩射と馬上で弓を射る騎射とがあります。騎射の中には、「三つ物」と呼ばれる戦勝祈願として懸けた笠を射る笠懸、犬を放って射る犬追物、「天下泰平・万民息災・五穀豊穡」を祈願して三つの的を射る流鏑馬の外に、騎射採物草鹿等があります。流鏑馬は、騎射の代表であり、平安時代には朝廷の儀式として、武家時代には武技の修練として盛んであります。

今日、騎射の中でも流鏑馬は、豊作祈願の祭礼として各地に残っていますが、時の流れと共に本来の形を失ったものが多いようです。武道としての流鏑馬は、源氏の流れを汲む武田流（細川家）と小笠原流（徳川家）によって、その正伝が護持されています。

4) 系譜

武田流は、今から約1100年前の9000年頃、清和天皇の皇子から源家七代に伝わった後、武田・小笠原の両流に分かれ、若狭武田家最後の信直から姻戚関係にあった細川藤孝（幽斎）が受け、家臣の竹原惟成が武田流を直伝され、細川忠興から忠利が1632年肥後に入国後は、政務多忙等で竹原家が宗家師範としてその一切を受け継ぎ、細川重賢の藩学・時習館では、武田流の流鏑馬は二条流和歌式や細川流礼法と共に必修科目であったと言われます。現在では、その保存会（竹原陽次郎理事長・宗家師範以下26名）が正しい流儀の保存のために精進しています。

5) 流儀

疾走する馬上で手綱を放し、瞬時に的を射る流鏑馬は、古式ゆかしく勇壮に見えます。しかし、この人馬一体となつての演技は、長年にわたる心技体の鍛錬を積んだ射手にも至難の技で

思わぬ事故が伴う危険もあります。
〔天長地久式〕

一番の射手（貫頭）が「世の平和と人馬の健康そして豊かな実り」を祈願するため、口伝の呪文を唱えながら天空と大地に向かって鏑矢を射るしくさをする武田流の厳粛かつ神聖で最も重要な儀式であります。これは、騎射を始める前に神前で執り行われます。



〔流鏑馬式〕

本馬での基礎練習や生馬に乗っての騎射には、天長地久式で神前に供えた鏑矢とは違う神頭矢を使います。本馬の一回転で矢を一本射ますが、その時間は、馬が実際の的の間の間を駆け回る速さと大体同じです。この本馬稽古は、流鏑馬の基本の作法と騎射で最も難しい矢抜き・矢替えの練習や鞍の乗り方を体得するには絶対的に欠かせません。流鏑馬式では、三方所のを置き、約30周（50m位）の間隔ですが、馬は約200mの直線馬場を20秒で駆け、手綱を放して射るので相当の熟練と胆力が要求されます。的中だけでなく、射手の手綱捌き、鬼面払い、乗馬と下馬の作法や、諸役（介添・口取り・幣振り・矢取り・太鼓役・馬場役・日記役等）の体配と幣の振り方、装束・重腰弓と神頭矢・手袋・網代笠の鬼面・和馬具一式・五色的と花等にも御注目下さい。

○連絡先:

特定非営利活動法人武田流流鏑馬保存会
ホームページ
<http://www.h7.dion.ne.jp/yabusame/>
〒862-0971 熊本中央区大江1丁目28-32
Tel & Fax 096-1364-6686